

湾岸通り敬老会

ぶんろく

残土の山の頂に老人が座っていた。湾岸通りに面した残土置き場跡を本拠地とする「湾岸通り敬老会」会長山本光太郎である。

空に月でもあれば、山本は月見をする風流な老人と見たかもしれない。しかし、老人の目は湾岸通りに向けられていた。

ゴールデンウィークも残すところあと一日となった深夜の湾岸通りは、東京方面も千葉方面も車が多かった。月はないが、煌煌と路面を照らす街路灯と周囲の工場の照明で闇夜ではなかった。しかし、人工照明が作りだす陰に潜む闇は、月のない夜の闇よりも更に深かった。その闇の中に先ほどから車が一台停車していた。

道の向こうには、「豊かな農村を目指して！ 土地改良公社」という看板が

立っている。三〇年前は東京湾奥の豊かな干潟であったこの土地を埋めたてにおいて、豊かな農村もないものだ、と山本は思った。

彼は、この残土置き場の地下に封印された海を望む漁村で育った。東京オリンピックを境に、遠浅の海が埋めたてられ、工業団地に変わった。その後、さらに海は遠くなり、マンションが建ち並んだ。山本の家は、父祖の代からアサリや海苔などの江戸前の魚介を生業としていた。山本は小学校を出ると、当然のように漁師になった。だが、埋めたてが始まったときに、山本は補償金をもらって廃業した。そして海の見えない、浜風も吹かない内陸に引越し、一人息子は埋立地にできた工場に就職した。やがてつれあいが亡くなり、足腰が弱くなると、山本は山の中の老人ホームに捨てられた。

山本はホームに入る前に息子の一信に聞いた。

「どうして老人ホームなどにはいらなくちゃならないんだ。おまえにも春子

さんにもこれといって迷惑をかけているとは思えんのだが」

「子どももそろそろ受験だし、春子もパートにでている。お父さんの面倒を十分に見られないからですよ」

「まだ、自分のことは自分でできるさ」

「それに、ここらは、新しい町でお年寄りも少なくておもしろくないでしょう」

一信は父の言い分など聞きたくないとはかりに、理由をあげつらった。一信の嫁の春子は台所で洗い物をしている。こちらに背中を向けているが、心は一信の肩の上であり、耳元で息子を叱咤していたにちがいない。

「なんで年寄りには年寄りが好きだと決めつけるんだ」

「そういうわけじゃないですけど……」

「施設に入れる金があるんなら、アパートを借りて住んじゃいけないのか。」

めざわりなら、離れて住むさ」

「それじゃお父さんが不自由でしょう。それに、この前みたいなことがあると心配だし」

やはりそうだった。この前のこと　茶を飲もうと思って山本が湯を沸かしているのを忘れて、小火をだしかけたことだ。パートから帰ってきた嫁が悲鳴をあげるまで、すっかり忘れていた。幸い大事には至らなかったが、嫁が息子に「お義父さんぼけたんじゃない。こんな事があると心配で家をあげられない」とぼやいていたのは知っている。翌日には、隣近所に知れ渡り、「山本さんも歳なんだから気をつけないと」と言われた。壁と壁のあいだにネコの通り道ほどの隙間はあるものの昔の棟割長屋とさして変わらない建売住宅地で、隣に火事をだしかけた老人がいると不安なのだろう。

「なにも道端に棄てるといっているわけじゃないでしょう。僕らには十分に

面倒を見るだけの技量がない。だから、プロに任せて、なにがいけないんですか。お父さんだって、息子の行き届かない世話よりは、痒いところに手の届く世話を受けたいでしょうが。どうして、わかってくれないんですか。老いた親を子が自分で面倒をみるなんていうのは、お父さんの時代の社会的な学習効果にすぎないんですよ。今の時代は

「ほ、学校に行くと難しいことをいうようになるもんだ。それとも、理屈っぽいところは、おまえのかあさん譲りかな」

山本は目を細めながらいった。

「まあ、いいさ。おまえのいう施設に入ろう。なんていう名前だったかな。すこやかシルバーホームか。けどな、これが今の世の中なのかもしれないが、おまえの息子もおまえから学習していることを忘れないことだな。いろいろと理屈はつけてくれるが、結局は、外聞だろうが外聞。小火を出すような老

人がいると世間体が悪いから施設に入れたいんだろう。一人暮らしができるくらいなら、追いだすこともない。でも、施設に入れるということは、家族の手に余るということを、世間に認めさせる理由になるからな」

*

山間の緑に隠れるように建てられたホームは、こじやれた外観とは裏腹に、人間の住むところではなかった。「老人」と名づけられた生物の飼育箱だった。

カーテン一枚で仕切られた六人部屋に押し込められ、朝はいつせいに起床、夜もいつせいに消灯だ。まるで軍隊だった。酒もタバコも禁止され、食事は歯があろうとなかろうとおかゆと、野菜や肉をなにもかもいつしよくたに、色も形もわからなくなるまでミキサーにかけたスープだ。ちよつと体調を崩せば、すぐに点滴に変えられる。それまでの何十年かの習慣や一人一人の個

性という名の文化に対する尊敬などかけらもない。

一回でも失禁をすればすぐにオムツをつけさせられた。食事もトイレもベッドでさせておいて、無理やりにリハビリルームに連れて行き、子どもじみた遊びをさせる。なぜ八〇、九〇の老人が童謡など歌わなければならぬのだ。クラシックが好きだったものもいれば、演歌やジャズが好きだったものもいるはずなのに、タンバリンやカスタネットを手に童謡だ。テレビもニュースか時代劇ばかりだ。

そうやって、統制することで、世話をしやすくしているだけなのだ。

動けなくさせられれば、脳みそだって活動を止める。そうすればボケも始まる。オムツの中にウンコをすれば気持ち悪いに決まっている。オムツをはずそうともがけば、「うんこをもてあそぶ」問題行動というので、手足を縛られたり、自分では脱げないような鍵付きの服を着せられる。

こんな屈辱は囚人だって受けないに違いない。歳を取ったというだけで、ボケているからというだけで、死に行くまぎわに、なぜこのような仕打ちを受けなければならぬのか。

山本は必死に抗った。新聞の隅から隅まで目を通し、ささいな事件にも腹を立て、つまらぬマンガにも無理に笑い、株式欄を見ては買ってもいない株の値の上昇下落に一喜一憂し、感情を波立たせてきた。職員の言い付けを良く守り、文句を言わず、目立たぬように生活していた。食事は残らず食べ、暇をみつけては、階段を上り下りし、窓枠に手を掛けて腕立て伏せもした。風呂に入れば、湯の中で掌の開閉をして体を鍛えた。

そうして必死に生き抜いた山本だったが、ホームでの五度目の正月を越したころから腰の周りがズンと重く痛くなり、便に血が混じるようになった。老い先が短いことを悟らずにはいられなかった。死ぬときに山など見ていた

くない、そう思った。だから、ホームの庭の桜が咲き、緑が濃くなるにつれ、
いてもたってもいられなくなって出奔してきた。一年前の四月中旬だった。

故郷に帰ってきたことは息子には知らせていない。息子の家に立ち寄るつ
もりもない。ホームからの連絡で行方不明になったことは、息子も知ってい
るだろう。ホームに迷惑がかからないように、覚悟の出奔であることを記し
た書き置きも残してきた。警察に行方不明の届けぐらいはだすだろうが、死
んだも同然だった山本を息子は探すことはないはずだ。葬式代が助かったぐ
らいにしか思っていないだろう。

山本は最初からこの場所にたどり着いたわけではなかった。ホームに入る
ときに隠し持って行ったものの使い道がなくて残っていたへそくりを使って、
電車とタクシーを乗り継ぎ、故郷へ帰ってきた。ところが、目印になる海が
なくなってしまう、道に迷った。とうとう、昔住んでいた自分の家の場所も

わからなかった。歩き疲れ、死のうと思ひ、この残土置き場跡に入りこんだ。死ぬのにはもってこいの静かな場所だった。そのときも今と同じように真夜中、この場所に座って「海」を見ていた。

ところが、山本の目の前でもおもわぬ事態がおきた。老人が捨てられたのだ。残土置き場の前の湾岸通りは、東京からくると右に緩やかに曲がっている。そのカーブの出口、街灯が途切れて薄暗くなっている場所に車が止まった。歩道側のドアが開き、老人が降りてきた。山本は最初、小便にでも降りてきたのかと思った。しかし、老人が両足を地面につくやいなや、車はドアを開けたまま千葉方面に猛スピードで走り去った。老人は、歩道の縁石に座り込んでいる。いつまでたっても老人を降ろした車は帰ってこない。時間は真夜中だ。知り合いを訪ねるには不自然な時間だし、工場地帯に人家などないはずだった。老人は縁石に座り込んだまま。何台か車が通過したが、一台も

止まらなかつた。明け方まで待つて、山本はその老人を迎えにいった。

山本は車が来ないことを確認すると、車道に出て老人に話しかけた。くらがりて後ろから声をかけられれば、大の男でもびっくりする。心臓発作をおこされたらかなわない。

「そんなところに座っているとあぶないぞ。もうすぐ夜明けだ。車の通りが激しくなる」

老人は顔を上げた。女だった。歳は山本よりはだいぶ若いように見える。返事はない。山本は根気よく声をかけた。老婆の目に警戒の色がないことを確認すると、少し近づいて腰を下ろした。傍から見れば、夫婦喧嘩をして家を飛びだした妻をなだめる夫に見えたかもしれない。春とはいえ夜は冷える。山本は着ていたジャンパーを老婆に羽織らせると声をかけた。

「ここは冷える。すこし歩いたところに風の当たらないところがあるから」

ようやく老婆は腰を上げた。山本は大きなくしゃみをひとつすると、老婆の手を引いて残土置き場に戻った。

老婆を残土の山の窪みに座らせると残土置き場に散乱していた段ボールを拾い集めにでかけた。自分がいない間にいなくなるのではないかと思っただが、帰ってみると老婆は先ほどのままに座っていた。

山本は、ダンボールを一枚を地面に敷いてやった。

「もうすぐ朝になるが、少し寝なさい。後のことは起きてから考えればいい
な」

老婆は静かに横になると目を閉じた。山本は彼女の上にダンボールを掛けてやると自分もダンボールを身体に巻きつけ、老婆の脇に横になった。

湾岸通りに行く車の音、残土置き場の脇を走るJRの列車の音で山本が目
を覚ました時には、すでに日は昇っていた。

老婆はクークーと寢息をたてている。昨夜は気がつかなかったが、ぽつちやりした顔つきで色が抜けるように白かった。唇は紅をさしていないのにきれいな桃色をしている。裸にしたら、乳首も桃色かもしれないと、山本は不謹慎に思った。山本は十数年ぶりに女と同衾していることに気がついた。妙に落ち着かない気分になって、山本は老婆を起こさぬように段ボールからでると残土の斜面に腰を下ろした。彼女をどうしたものだろう。とんだ拾い物をしたもんだ。交番に届ければ、自分のことも話さなくてはならない。昨夜まで死を覚悟していた山本は困惑していた。山本にとって彼女は闖入者だった。だが、彼女の出現に自分の命が救われたこともまた事実だった。

老婆を見返ると、いつのまにか起きていた。段ボールの上に正座し、山本を見下ろしている。自分が草っぱらで、段ボールを被って寝ていたことを不思議に思っていないようすで、静かに座っている。

「起きたのかね。良く眠れたかな」

「ええ、おかげさまで。井上君は」

「井上？ わたしは井上じゃなくて、山本というもんなんだが」

山本はこの老婆がぼけていることに気がついた。ホームにも同じような人間がたくさんいた。

「あんた、覚えていないのかね。きのうの晩、この前の道路に置き去りにされたことを」

「井上君たら、からかっているのね。わたしもう帰る」

山本が黙っていると、老婆は立ちあがり、服についた草をはらっている。彼女には今の状況がどのように見えているのだろうか。山のなかの逢い引き？ それとも公園かどこかと思っているのだろうか。

「帰るって、どこへ帰るんだね」

「決まっているじゃないの、家よ」

なんだ、家がわかつているのか。それなら、勝手にすればいいと山本は思った。

山本が知らんふりをしてしていると、老婆が残土の山を登って行く音がする。山本は少し待ってから、後をつけてみた。老婆は頂を越え残土の山を下りると、振り返った。山本は慌てて雑草の茂みにしゃがんで隠れた。自分でもなにやっつてんだとおもった。これじゃ、がきのかくれんぼだ。

雑草の隙間からうかがっていると、彼女はまた斜面を登りはじめた。そしてまた下りて……。彼女は残土置き場をぐるぐると巡り歩いた。時々立ち止まると、思案するように人指し指を唇に当て周囲をみまわしてみたり、指先であちこちさして何事か確認している。残土置き場からはでていく気配がないので山本は彼女の後をつけるのを止めた。見晴らしのいい残土の山の頂に

座ると老婆の姿を目で追った。しかし、老婆が残土置き場の脇を流れる運河の淵で何事か思案しているのを見て、斜面を駆け降りて、老婆に声をかけた。

「おい、家に帰るんじゃないのかね」

「あら、井上君。あたし道に迷っちゃったみたい。へんね」

山本はホームで暮らすうちに、ぼけたやつにさからうなどと学んでいた。ホームでまともにとりあって、あげくに杖で殴りかかられたり、ひっかかられたりしたことがたびたびあったからだ。山本は老婆に調子をあわせた。

「おれも迷っちゃったみたいだ。一緒に道を探そうや圭子ちゃん」

「いやね、井上君。あたしは圭子じゃないわ。園枝よ」

「あ、ごめん。園ちゃん。だけど園ちゃんだってさつきからおれのこと井上とまちがえているじゃないか。おれは養子に入って、いまは山本だ」

「あら、忘れてた。ごめんなさい」

山本はとっさに死んだ女房の名前を口にした。養子の話は口からでまかせだ。ホームの生活で時空を縦横無尽に往き来するボケ老人と付き合っただけで身につけた知恵だった。他人が見たら馬鹿馬鹿しくなるような素人芝居だったが、老婆の名前がわかっただけでもめつけものだった。園枝の手を引くと、夜を明かした窪みに連れていき、腰を下ろした。

「こういうときは、動き回るとかえってよくない。ここで、搜索隊をまとっ
園枝は静かにうなずいた。日はすっかり高くなり、残土の山から陽炎がた
ちのぼっている。山本は急に空腹を感じた。今朝の園枝に対する性的な興味
といい、からだはまだ生きたいと感じているのかもしれない。歩き疲れたの
か、園枝はうとうととした。どのくらいの間、彼女が寝ているかわからな
いが、山本は握り飯でも買ってこようと思いい、コンビニを探しに残土置き場
を出た。

戻ってみると窪みに園枝の姿がなかった。やっぱりでていった。と思っ
た。ちよつぱり残念に思っている自分に気がついた。しかし、所詮は行きず
りだ。捨てておこうと思った。だが、運河にでもはまって死なれると目覚め
が悪い。山本は残土置き場を探して回った。

「園ちゃん」

返事はない。そもそもが、園枝という名前さえ真実とは限らなかった。ボ
ケが老婆に見せていた世界の中の登場人物にすぎないのかもしれない。それ
でももう一度だけ山本は名を呼ばった。

「園ちゃん。山本だ。握り飯を手に入れたから、一緒にたべよう」

ザササと雑草の茂みが動いた。

「園ちゃんかい」

「山本君、こつちに来ないで。あつち行つて」

「どうした」

「女性にそんなことを聞くもんじゃないわよ。あっち行ってったら行ってよ」
どうやら、茂みにしゃがんで雉を撃つていったようだ。園枝が出ていかなかったことにほっとしている自分に気づいた山本は、死ぬのはすこし延期だと覚悟を決めた。

どういう加減なのか、園枝はその後も残土置き場にいついた。山本は園枝との奇妙な暮らしが始まった。

が、それも長くは続かなかった。

園枝を拾ったあとも、老人のぽい捨てが続いた。敬老会に新入りが多いのは土曜日の深夜や、連休の終わるころの深夜がいちばん多い。

捨てられた老人を拾ううちに、捨てられる場所が大体決まっていることに山本は気がついた。車道と歩道との間に植え込みがあること、街灯と街灯の

中間で信号のすぐ手前だ。次の信号で引つかかると気分が悪いのだろう。信号が変わるのを待つように置き去りにして、走り去る。敬老会のある残土置き場の前がまさにそのロケーションだった。

それがわかってからというもの、土曜や連休などの深夜になると、山本は道路ちかくの残土の斜面で張り込んだ。そして、姥捨て車が出没するたびに車のナンバーを山本は必死に覚えた。

山本の想像だが、地方から東京ディズニーランド見物をだしに、老親を連れてきた帰りに捨てていくらしい。老人を捨てていく車に、東京や千葉といったナンバーが見られないのも山本の予想を裏づけているように思えた。

§ 2

南を湾岸通りに面し、東西をJRの高架線路に囲まれた三角形の土地は、

かつては残土置き場として使われていた。いまもその名残で、周囲より一段高く、二階家ほどの高さがあった。草野球場なら二面はとれる敷地には、湾岸通りから道が引き込まれているが、左に微妙にカーブして、その先は道路からは完全に隠れている。入口には地面を這うように鎖がかけられている。その脇にはここが、大手デベロッパの所有地であることを示す看板が立っている。残土の上に登ると窪みがあったり、敷地の南西と北側にはさらに高く盛り土がされている場所がある。三〇年も前だったら、子どもたちの格好の遊び場になって、秘密基地や砦がいくつも築かれたに違いない。しかし工場地帯に子どもの姿はない。

東京ディズニールランドから千葉方面に一〇分ほど走った場所にあるにもかかわらず、変形な土地と、線路にはさまれているという立地もあり、日本経済が沈滞する中で、マンションやハイテクビルに生まれ変わることもなく、

忘れられた空間となっている。

春になれば雑草が芽吹き、枝を伸ばし、花を咲かせる。JRを利用するもののなかには、そうした季節の移り変わりに目を留めていたものもいただろう。しかし、まさかこの空き地に、一〇人以上の老人が生活しているなどとは想像すらしなかったに違いない。なにかのはずみで、彼らの姿が目に入ったとしても、浮浪者が空き地に入り込んだぐらいにしか思わないだろう。

ボケが進行して徘徊する人間にとって、何も無い場所は徘徊がしづらいうだ。拾われてきた当初は誰も彼もが小屋の中でじっとしていることが多い。しかし二、三日もすると、小屋をでて空き地を徘徊し始める。最初はめちゃくちゃに歩き回るが、そのうちに徘徊も規則正しくなるし、それにつれて言動も落ちついてくるから不思議なものだ。現在、湾岸通り敬老会にいる徘徊老人は三人だが、かれらは他の人間の徘徊道を歩くことはない。この空き地

には獣道ならぬ徘徊道が縦横に走っている。上空から見たらさぞや面白い模様を描いているに違いないと思う。

山本は、一年前に園枝を拾った日のことを思いだして空を見上げた。見上げたところで、あの日と同じで、星が見えるわけでもない。先ほどまでは、工場の屋根をかすめるように、羽田に離発着する飛行機が航跡を見せていたが、この時間はただ、何も映さないブラウン管のような奥行きのないにじつた色の空があるだけだ。

「山本さん、どうやら新入りのようです」

山本の後ろから残土の山を登ってきた鈴木園枝が声をかけてきた。記憶に欠落があつて、一年経つたいまでも、自分がなんでここにいいのかわからな
いでいるのだが、日常生活に不便はない。名字は捨てられたときに着ていた服の襟裏の縫い付けがきつかけでわかった。最初は縫い付けにあつた「小川」

と呼んでも返事をしなかったが、あるとき、自分は鈴木だといいはった。「おじいさんに無理やり名前を変えさせられた」という。山本は、結婚前の姓が鈴木なのだと考え、以後、鈴木と呼んでいる。

鈴木は、早い段階で名前がわかった珍しいケースだった。他のものは、当然のことながら、身元がわかる手がかりなど何一つ身につけていなかった。

当初山本は、老人たちを拾った月日で「八十八夜」とか「十月六日」などと呼んでいたが、それが、山本が暮らしていた老人ホームでの職員の話

三階二号室の五番ベッドさん失禁！ と変わらないことに気がついてから、

適当な名前をつけて呼ぶことにした。男であれば、山本のガキのころの遊び仲間であったり、戦友であったり、漁師仲間の名前を拝借した。女であれば、飲み屋の女将や幼なじみの名前で呼んだ。ところが面白いもので、月日で呼ばれていたときには抵抗を示さなかった人間が、名前で呼ばれたとたんに

「わたしはそんな名前じゃない」と言いだす。おかげで、いまではほとんどのメンバーの名前がわかっている。

「山本さん」

鈴木がもう一度声をかけてきた。返事がないので寝ているとも思ったの
だろう。

「ほ、わかっている」

先ほどから、空き地前の湾岸通りに車が停止しているのには、山本も気づ
いていた。仮眠の車であってくれと祈っていたが、悪い予感的中した。ゴー
ルデンウィーク二台目となる姥捨て車だったようだ。

「車のナンバーは」

「泥で汚しているようですが、大阪方面のようです。記録係が記録している
はずです」

「悪質なケースだな。お迎え班に出動を」

「はい」

山本の指示を仰いだ鈴木が、お迎え班に出動を伝えに残土の山を下りているところ、湾岸通りに停止している車の運転席では、伊藤俊治がハンドルを握りしめたまま前を向き、ときどき、神経質そうにバックミラーとドアミラーを見ていた。前後に車の影はない。助手席では妻の直子が寝ている。

「早く降りてくれ、かあちゃん」

伊藤はリアシートを振りかえって老婆に声をかけた。

「さあ、かあちゃん。家に着いたからここで降りるんだ」

「……」

「達者でな、かあちゃん」

「……」。俊治元気でな、また遊びにきておくれ」

老婆は、運転席の俊治ではなく、自分の隣に座っていた一〇歳くらいの男の子に声をかけた。

「……」

声をかけられた子どもは手の中のゲームに夢中で、ばあちゃんを無視している。老人がここで降ろされることにも疑問を持っていないふうだった。

車のドアが開き、老人がのろくさと降りていく。老人が丁寧にドアを閉めると車は急発進してあつという間に見えなくなった。

「いま、かあちゃん、俊直にむかっておれのこと呼んだな」

「だいじょうぶよ、あんた。ボケちゃっているんだから。なんにもわかりやしませんよ。だいじょうぶ。もっとスピードだしてよ」

寝ていたはずの直子が答えた。

丘の上から見てみると、お迎え班が、捨てられた老人のところにようやく

たどり着いた。迎えに行くのが遅いと命にかかわることがある。

不思議なもので、車から降りた老人は走り去った車を確認するように振りかえる。そこに何もないと目の前の道を渡ろうとする。反射的にそうするようだ。深夜とはいえ幹線道路だから車が途絶えることはない。ましてや歩いてるぶんだけスピードをだして走っている。運が良ければ横断に成功するが、なかには、横断に失敗したネコやタヌキのようにはねられてしまうものもいる。これまでも、お迎えが間に合わずに死んだ老人が一人いる。はねられたところで、身元を証明するものなど何もないのだから、無縁墓地に行くだけだ。

敬老会のメンバーが増えた今では、山本が迎えに行くことはない。お迎えの専門チームが出向く。ほかに、土日や連休の夜に、捨てられた老人を発見する見張りや、捨てていった車のナンバーを確認する係もいる。

さきほど発見された老人は救われる。もちろん見張りは、老人を道端に捨て、走り去った車のナンバープレートを記録しているはずである。鈴木や最初のころの何人かは、その記録がないのが、山本にとっては痛恨事だった。

§ 3

湾岸通り敬老会とは、会長の山本がそう呼んでいるだけで、その「存在」を知っているのは、敬老会のメンバーでも、ボケが少ないものだけだ。ましてや近隣の住民が知る由もなく、地元の自治体から福祉予算がでることなど絶対がない。山本のほか、副会長の鈴木園枝、お迎え班長の野末喜代志、介護系の鳥海春江、食料系の北中孫次郎、記録班の岩波重次郎などがいる。ほかのメンバーの大半はボケが激しすぎて、敬老会の「公務」には就けない。自分は鹿児島にいたのだ、大阪にいたとか山形にいたとてんでに信じてい

る。たしかに訛りはある。きつと子どものころ住んでいたところなのだろうが、捨てられるまでそこに住んでいたのかどうかは、確かめるすべはない。

現在、メンバーは一三人。先ほどの老人がここにいつくようなら一四人になる。

山本は残土の頂から下り、湾岸通り敬老会館に向かった。残土置き場の西側にある窪みに立てられた小屋だ。先ほど救出された老人がそろそろつくころだ。

メンバーは敷地のあちらこちらに建てられた小屋で暮らしている。敬老会館もメンバーの小屋も、三ヶ月前に死んだ、手塚次朗が建てた。ボケが激しい男だったが、木を拾って来ては何かを作ろうとしているので、玄翁と鋸などを拾ってきて与えてみると、あちこちに小屋を建て始めた。人生のある時期、大工として身を立っていたのだろう。若いころ身体で覚えた技術は、

ちよっときつかけを作ってやればでてる。しかし、注文には応じてくれないので、手塚の作品の中で一番大きな小屋を敬老会館として使っている。

死期が迫ったものもここに収容されて、介護系の鳥海が世話をしている。彼女は、クリスマスに捨てられた。最初は錯乱して、山本を困らせた。拾った翌日になると、「私はアメリカに行くという」。しかたなく、「それじゃ、まず、電車に乗って、飛行場に行かなくちゃなるまい」と言い聞かせて、JRの電車が見える場所に座らせておいた。夕方になって、「今日は電車が終わつたみたいだ。また、明日にしよう」と声をかけると、おとなしく、小屋に帰った。そんなことを繰り返しているうちに落ち着きを取り戻した。元気で明るく面倒見がいいので、介護係についている。

「こちらさんが、新入りです」

敬老会館に到着した山本に、お迎え班長の野末が声をかけてきた。彼も鳥

海と同じころに捨てられた。律儀で温和な性格はお迎えにはもってこいだつた。

「ほ、じいさんや、名前はなんと言つ」

「山本さん、ばあさんのようですが……」

「ほ、そうかい。コリヤ失礼。で、名前は」

「……」

「名前を書いたものはなにもありません。金も食料も着替えも持っていませんでした」

老婆が答えないのをみて、鈴木が答えた。

気のきいた「棄老人」の場合にはコンビニのおにぎりと飲み物が入った袋を手にしていることもあるが、大部分は、何ももたない。つまり「死んでくれ」ということらしい。

「息子は」

山本のこの問いかけに、ばあさんは反応した。

「俊治」

「嫁は」

「……」

「だんなは」

「女つくって逃げた」

「どこの生まれだ」

「生駒」

「ほ、やっぱり大阪か。まあ、今夜のところは、ここに泊まっていけばいい。

明日になってでて行きたければでて行くもよし、ここにいてもよし」

鳥海に「握り飯の残りがあつたらそれを食わせてやってくれ」と言いつけ

ると、山本は敬老会館をでた。後ろから鈴木がついて来る。

「山本さん、どうですか新入りのようすは」

「ああ、ボケちゃいるようだが、反応があるだけでした。ここにいつくようだったら、しばらく様子を見よう。面倒見てやってくれ、鈴木」

敬老会の役員たちも山本を除いて少なからずボケているし、身体にどこかしら障害を持っている。しかし、捨てられたときにボケがひどかったものも、ここで、生活しているうちにボケの進行がゆるくなっていくようだ。管理されて「生かされている」環境から、「生きようとしなければ」次の瞬間に死が迫っていることを本能的に感じるのかもしれない。だから、捨てられたときにボケが激しいものでも、しばらく様子を見ることにしている。

「はい、それはもちろん。山本さんは、もう床につかれますか」

「ああ、そのつもりだが」

「ごいっしょしてもよろしいですか」

鈴木園枝とは、彼女がここへ来て以来、ずっと一緒に暮らしていた。当時は小屋などなかったから、ダンボールを被って並んで寝起きしていた。やがて、掘つ立て柱を立て、ダンボールで壁を作り、二人が並んで寝られる空間を作った。それからも雨露をしのぐシートを探して来たり、雨が流れ込んでこないように家の周りに溝を掘ったりという作業は、所帯を作っていくように楽しかった。あるとき戯れに鈴木園枝を抱きしめると嫌がらずに身体を摺り寄せてきた。それから、ときどき、まぐわうこともある。小屋に向かって歩き始めると、声が追いかけてきた。

「山本さん、大変よお。ちよときてよお」

少し奇妙なイントネーションで山本を呼び止めたのは、キムだ。朝鮮半島出身の彼女は、小正月のころ捨てられた。ほかに、日系ブラジル人がいた

こともあるし、中国残留孤児もここにはいる。

「なにが大変なんだ」

「野反が、海で拾ってきたアサリ、生で食べ始めたよ。それも殻ごと」

野反はキムの翌日に捨てられた。最初、いっしょに暮らしていたこともあって、敬老会館をでた後も二人で暮らしている。野反は日本語がキム以上に怪しい。ヒステリーを起こすとわけのわからない言葉を話す。それが中国語だとわかったのは、野反を拾ってからしばらく後のことだ。もしかしたら彼女が中国残留孤児ではないかと疑った山本が近所の図書館に通い、新聞の縮刷版で、残留孤児の訪日調査団の顔写真の中に野反を見つけたのは、さらにしばらく経ってからだ。人民服に身を包んだ彼女は表情が硬かった。写真の下には「王美鈴」とあった。ニュースを追うと、離日寸前になって、彼女のおじがみつかった。それで、名前が野尻美鈴だということが判明

した。野反は、茨城の海辺で生まれ、二歳のときに大陸に渡つたらしい。孤児になつたのは大連のある遼東半島付け根の海城付近だという。

「なんでこんな真夜中にアサリなんか食う気になつたんだ。本人はアサリだと思つているのか」

「どうやら柿の種だと思つているみたいよ」

山本がかけつけると、荒地を少し掘り下げ、小屋掛けしたなかで、野反がアサリを頬張っていた。口には入れたものの、歯のない口では噛み砕けるわけもなく、かといって飲み込むには多すぎる量だ。冬眠前のリスのように頬だけがふくらんでいる。笑いだしたくなるような光景だ。

もう潮干狩りができる季節なので、一週間間ほど前に、敬老会のメンバー総出で近所の海浜公園にでかけた。昼間でかけると漁協のやつらが見張っているので、真夜中の大潮をねらつてでかけた。敬老会には船が二艘ある。ど

ちらも運河に捨てられていたべか船を山本と、沖縄出身のウミンチュの金城が修繕したものだ。夜中に船に分乗して、公園にでかけ、貝を拾った。

野反の口をふさいでいるのは、そのときの収獲だ。一週間以上経ったアサリは陽気のせいもあって、当然腐っている。すごいにおいだ。柿の種だと思いきこんでいる本人は、そんなことにはおかまいなしだ。

「おい、野反さんよつ、いいかげんにしないと、死んじまうぞ。柿の種はまとめて食らうとたしかにとうめえが、明日、孫がくるんだろ。すこしは取っておいてやらないと」

野反の前に片ひざをつけて腰を下ろした山本は適当に話を作って声をかけた。山本に話しかけられた野反は、心外だといわんばかりに顔を真っ赤にして何か言いたげだ。しかし、口の中のアサリが邪魔してしゃべれない。ついに咽せはじめ、キムに背中を軽くたたかされると、機関銃のようにアサリを吐

きだした。

「きつたねえな、なにすんだ」

山本はまともにあさりのつぶてを全身に浴びてしまった。

「孫だあ？ わしは子どもなど産んだこともない乙女だ。顔が赤くなるようなこというんじゃない。このあほだらが」

「そりゃ、下品なこといってすまんかった」

野反が、山本の言葉に怒っている間にキムが、アサリをかき集めて捨てにいった。野反はもうすっかりアサリのことなど忘れている。

まったく世話が焼ける連中ばかりだ。こつしたトラブルは毎日だ。もともと金などもっていないのに金を取ったの取られたのという争いもある。しかし、世話は焼けるが、それが生きている証なのだからしかたない。

野反が落ち着いたので、後をキムに任せ、山本は小屋に向かって歩きだし

た。夜明けまで二時間ほどだ。湾岸通りを走る車の音もだいぶ間をあけるようになった。山本と鈴木が小屋について、今度こそ寝られるとおもって、横になりかけたとき、小屋の外から声がかかった。

「山本さん、もうお休みですか。たびたびすみませんが、また新入りです」
声をかけたのは見張りの金城だ。彼は沖縄で暮らしていたが、今年の正月にここに捨てられた。東京の寒さにやられるかと思っただが、ウミンチュで鍛えた体は頑健で風邪ひとつひかない。しかし、湾岸通りの汚い空気に気管支をやられて喘息気味だ。ボケは軽度だが、アルコール依存症で家族に嫌われたいらしい。拾われて来た当初は「酒を飲ませてくれ」と山本にからんできたものだ。山本と鈴木がしかたなく、「はい、お酒」といって茶をだすと、一息に飲み干し、「うめえなあ。こんなうまい酒は初めて飲む」といって自分の小屋に帰っていった。アルコール中毒といってもさしつかえない金城が、茶を

酒と間違えるはずもないのだが、酒そのものよりも、寝酒をきゅーっと一杯引つ掛ける習慣が満たされたことで満足したようだ。金城は自分が捨てられたことを知っている数少ない人間だ。住んでいた場所もわかつてはいる。だが、金がないので帰ることができない。本人も捨てたやつらのところには、「足がなくなつてから帰つてやる」と言い張っている。

「ほ、きょうは大入りじゃな。今度はじじいか、ばあさんか」

「じいさんです」

「お迎え班出勤じゃ。車のナンバーの記録も怠りなく。このぶんじゃ今夜はまだ寝られんのう。鈴木は先に寝とれ」

久しぶりに園枝とまぐわう気になっていた山本は、疎ましい思いを腹の底に押し込めながら、残土の斜面を下っていった。

山本が寝ることができたのは、明け方になってからだった。流通のトラックがおおくなつてくると、「姥捨て車」も姿を消す。

昨夜二人目の「棄老人」は、錯乱していた。当然だ。夜中の道端に放り出されたと思ったら、数人の老人に囲まれたのだ。敬老会館へ連れていこうとすると、じいさんは「人攫い！」と大声をだして抵抗した。迎えにでた野末が機転を利かせて「そうだよ、僕。おじちゃんたちは怖い怖い人攫いだ。大声をだすと殺すよ」と声色を使ってすごんでみせると、「わかったよ。僕、良い子にするから、お願い、殺さないで。おじさんたちの言うことなんでも聞くから」という。すっかり、その世界にはいつているのだ。

「それじゃ、良い子だからこっちにこい」と手を引くと素直についてきた。敬老会館に着いてからも、命乞いをするつもりなのか、「協力的な態度」で、

べらべらと良くしゃべった。赤城山がどうのこつのと云っていたところをみると、どうやら群馬あたりの人間らしい。落ち着かせて寝かせるのに苦労した。寝ている間に、「人攫いごっこ」のことを忘れてもらいたいものだと思う。

山本が目覚めたときには、小屋の中はすでに生い茂り始めた雑草の臭いで充満していた。食料の配布にでた鈴木の様子は寢床になく、かわりに半分だけ入ったコンビニの弁当が残されていた。

敬老会から北へ一五〇メートルほどのところに繁華街がある。食料調達班の北中は夜になると、その日体調がいいものを何人かつれて、繁華街に出向き、賞味時刻切れとなったコンビニの弁当を失敬してくる。連休中はコンビニもフル稼働だ。昨夜は売れ残りの弁当が少なかったのだろう、いつもなら、充分に行き渡る食料が今朝はいつもより少ない。

昨夜の二人をあわせて、連休中に捨てられたのは三人だ。ひとりほボケが

ひどいのと、衰弱がはげしく、すぐに死んだ。あとの二人は元気だ。都合五人か。食料の調達と分配が頭痛の種になりそうだ。

北中が集めた弁当は、朝になると、鈴木が空き地に点在して暮らす一人一人に配って歩く。ついでに安否を確認する。

ここでの暮らしは、食料をのぞけばあまり不自由はない。風呂は隣の運河か、湾岸通りを越えたところにある公園の水道ですます。トイレも同様だ。オムツをつけていたやつは、はずす。はずしたからといって不都合はない。徘徊するようなやつは、どちみち、トイレでは絶対にしない。かれらは自分のルールにしたがって、徘徊道の決まった場所をトイレにする。場所は決まっているから、介護系の鳥海が一日に一回、徘徊道を見回って糞を始末するだけでいい。傍からみれば立派な野グソだが、本人たちにとってはそこが便所に見えるのだ。ある時、山本が気まぐれに徘徊道をたどって散歩してい

るとその場面にでくわしたことがあつた。実に気持ちよさそうに尻をだしている。野グソをすましたやつは、山本に向かつて「お先に失礼」といって、また、徘徊に戻つていった。

服は近所のゴミ捨て場をこまめにチェックすれば事足りる。年齢からすると不相応な派手なファッションが多いことも事実だが、死ぬわけじゃないし、年寄りが派手なのはそれだけで元気がでてくる。

昨夜の野反のように、とんでもないものを拾い食いするやつもいるが、不思議と病気にはならない。風邪を引くやつも少ない。

山本自身昨年春にここへやってきて、よく冬を越せたと、自分でもびっくりしている。一人じゃだめだったかもしれない。鈴木がすぐに捨てられ、その後も、続々と新入りが来てくれたから生きのびられたんだとおもう。そうでなければ、今ごろは無縁仏で、献体にも回されているかもしれない。

いやそんなに上等じゃない。野犬に噛み砕かれ、カラスとカモメに食い散らかされていたに違いない。

ここにいるものたちは、みんな棺桶に首から上を突っ込んではいるものの、胃袋と心臓、肺がしっかりしているばかりに、捨てられたとも言える。だが、死ぬときは、あっさりと静かに死ぬ。死んだら埋める。最初は遠くに捨てることも考えたが、運んでいくような体力のあるやつはいないし、警察犬でも使われて臭いをたどられたらこっちまでみつかる。運河に流すことも考えたが、これも、流域を探されると厄介なのでやめた。

いまでは敬老会のメンバーたちは自分で墓を掘るのが義務になっている。もちろん本人たちは墓穴だとは気がついていないのだが。山本もすでに墓を掘った。鈴木は山本のすぐ隣に穴を掘った。昨日の新入りも落ち着くようだったら、最初の仕事は墓掘りだ。

「敬老会墓苑」にはこの一年間ですでに六本の墓標が立っている。いまも死期のちかひのが二人いるから、数が増えるのは目に見えている。何年後かにマンションか工場が建つときに人骨が何柱もでて、騒動になるかもしれないが、山本の知ったことではない。

それに、山本はそんな先のことよりも、近い将来騒動を起こすつもりになっていた。こんなに新入りが多いのだったら、計画を早めたほうが良いかもしれない。今夜、敬老会のメンバーを召集して計画を議題に掛けようと思った。連休も終わる。家族が団欒に戻るころだ。夏休みまでは新入りもないだろう。山本もそうそう永く生きていることはできない。潮時を読み違えると、彼岸につけなくなってしまう。

伊藤俊治にとって、湾岸通りのあの瞬間は夢の中の出来事だった。途中で
Uターンして、母を捨てたところを通るのが恐ろしく、わざわざ、東京湾横
断道路を通り、東名にでて、夜通し走り、大阪の自宅に戻ってきた。車庫に
車を入れているとゴミだしにでてきた隣家の萩本のおばさんが声をかけてき
た。

「お帰りの俊直君。デズニerlandは楽しかったかい」

「デズニerじゃなくて、デイズニerだよ、おばさん」

俊直はなんの屈託もなく答えている。昨夜、ばあちゃんが自分に向かって
父の名を呼んだことなど覚えていないようだ。

「あらそうかい。ところで、千代さんは」

「東京の親戚に預けてきました。あちらにリハビリのいい病院があるってい
うんですよ。親戚も夫婦二人暮らしなもので、部屋も余っているといわれて

甘えることにしたんですわ」

「ふーん、そうなのかい。さびしいねえ」

俊治は、すらすらと嘘をついている自分に驚いた。妻の直子をみると、「夫の言うことに間違いありません」といった顔をして小刻みに首を上下させている。

本当に自分は母を捨ててきたんだろうか。

母がボケ始めたのは、一年前に足を骨折して入院してからだ。病院は、完全看護だった。お見舞いに行くと母が泣きだした。「俊治、お願いだからオムツをはずしてくるるように看護婦さんに頼んで」という。「なんでオムツなんかしているんだ？」と聞くと、「伊藤さんは足がお悪いから、トイレに歩いていくのも大変でしょう。それに、座ったり立ったりも辛いから、しばらくオムツをしましょうね」と看護婦に言われたそうだ。

看護婦に質すと「病院の方針ですから」という。それ以上聞くと、いつでも退院してくださいと言わんばかりだ。しかたなく、母には「怪我が治るまでの辛抱だから、医者の方針にすることは聞かなくちゃ」と言い聞かせた。そうやって、母はベッドの上だけで二ヶ月過ごした。ギブスが外れるころには、母は自分で歩くことができなくなっていた。退院のときは車椅子で病院をでた。オムツも最後まではずしてもらえなかった。

家に帰りつくと早速オムツをはずしてやった。オムツかぶれが痛々しい。「辛かつたらう。赤ん坊みたい扱ひされてさ」と俊治が声をかけると、母は力なく微笑んだ。

オムツをはずしたものの、母は退院後も一日の大半をベッドで過ごすようになった。食事もベッドで摂ることが多い。「食事のときぐらい身体を動かさないと、寝たきりになるぞ」と俊治が脅しても、「気分が悪い」とか「起きあ

「がるとめまいがする」といっては、ベッドですませた。妻は、陰では「足もすっかり治っているのにいい気なものだわ」と、俊治に文句を言っていたが、その実、入院前には、家事全般を取り仕切り、なにかとこつるさかった姑がおとなしくなり、自分の掌中にあることが嬉しくてしかたないようだった。

退院から一週間後、異変が起こった。俊治は「助けてえー、助けてえー」という母の叫び声にたたき起こされた。枕もとの時計は午前一時を少し回ったところだった。母の寝室に駆けつけた。母は掛け布団を抱えるようにして部屋の隅で震えている。

「どうした、かあさん」

「お、男が水を、ま、撒いて逃げた！」

母は、壁に背中を押しつけ、カーテンの閉まった窓を指差しながらわめいている。

「どこに？」

「布団だよおー」

触つてみると確かに濡れている。窓を確かめたが鍵はかかったままだ。濡れた指先を鼻にかざすと小便の匂いがした。母が寝小便をしたという事実俊治はパニックになった。自分を産み、慈しみ育ててくれた母が……。気がついたときには「いい歳して寝小便しておいて、なにさわいでいるんだ。おれは仕事で朝が早いんだいいかげんにしてくれ。つたく！寝入りばなを起こしやがって」と怒鳴りつけていた。母は「ごめんよお。もうしないから、許しておくれよお」と、叱られた子どものように両腕で頭を抱えて泣いていた。

落ち着いて考えてみれば、二ヶ月近い病院でのオムツ生活の習慣で、失禁してしまっただけだ。大騒ぎすることはないのだが、妻は、オムツをはかせ

た。母は抵抗しなかった。

この事件を境に、母の異常な振る舞いはエスカレートしていった。大便をたんすにしまいこむ、食事を食べさせてもらっていないと訴える。知らない男 俊治のことなのだが が入ってきて、わたしの身体を触っていった。金を盗まれた……。

退院から三ヶ月がたったころ帰宅した俊治を迎えた妻が、「お義母さんを、入院させて」と言った。そのまま背を向けてキッチンに行く妻を追いかけて質すと、「私には面倒見られない。俊直も受験が近いし、なんとかして」とだけいって、あとはだんまりを決め込んでしまった。

俊治は会社を休んで役所に行き老人保健施設の入所申し込みをした。窓口の役人は、俊治の話に親身に耳を傾けてくれていたが、俊治の申込書は「待機者リスト」と書かれた分厚いファイルの一番後ろに挟まれた。「どれぐらい

待てば、母は入所できるんでしょうか」と尋ねると、役人は厚さを量るよう
に鉛筆の尻でファイルの表紙を小刻みに叩きながら「一年は待つてもらわな
くては」という。がっかりしている伊藤に向かって「こういつては失礼です
が、伊藤さんのお母さんはまだいいほうです。もっとご苦労されているご家
族もたくさんいらっしゃいます。もうすこしががんばってください。それに
お年寄りのことですから、そんなに待たなくてもすむかもしれませんよ」と言
葉を重ねた。

待たなくてもいい　　という言葉の意味が、待機者が次々と死んでいくか
ら順番が繰りあがるということではなく、待っている間に母が死ぬというこ
とだと気がついたのは、帰宅してからだった。

有料のホームに入れるゆとりなどない。しかたなく自宅で面倒を見ていた
が、妻は母の面倒を見ることを拒否した。ご飯は作るが、食べさせるのは俊

治の仕事だ。オムツの交換も入浴もやる。自分の母なのだから当然だと思っ
た。しかし、仕事中でも母が騒げば呼びだされる。仕事から帰ると、朝から
着けっぱなしのおむつの交換が俊治の日課となった。

大便が爪に入り臭いが取れない。会社で弁当を食べている時も鼻につく。
気がつくと俊治は深爪が習い性となり、アルコール消毒のしすぎで、手荒れ
がひどくなった。

夜中のオムツ交換や騒ぎだす母をなだめるのに付き合っているうちに、寝
不足になってきた。仕事に差し障りもでてきた。

「昼間だけでも付き添い婦を頼もう」と妻にいうと、「そんなの嫌よ。まるで
私が面倒みていないみたいじゃない。それに他人を家に入れるのは面倒でい
や」と突っぱねられた。実際面倒なんて見てないじゃないか、と怒鳴りつけ
たい気持ちで俊治はかろうじて押さえこんだ。

そして連休前、少し母の様態もおさまってきたので、旅にでもしようということになった。母も旅にできれば、気分転換になって、少しは元気がでると思ったのだ。行き先は俊直が行きたいといっていた東京ディズニーランドにした。

だが、その帰り、湾岸通りを走っているときに、ふと気がつくと前後に車がいなかった。道端に残土置き場が見えてその前がすこし暗くなっていた。歩道に人影もなかった。ここに母を捨てていこうと、思った。

魔が差した　それだけだった。今になって理由を探してみれば、母の面倒をみるのに疲れてもいた。先行きに不安もあった。いつか母は死ぬ。それまでの辛抱だとわかっていても、自分のほうが先に死んでしまうのではないかという、自分勝手な恐怖もあった。

街路灯が途切れた薄暗い路肩に車を止め、「降りてくれ」というと、母は素

直に車を降りた。そして、自分は母を捨てた。

*

群馬県赤城山の麓の西原家では、当主の輝明がコップ酒を呷っていた。そばで妻の敏子が何食わぬ顔で洗濯物をたたんでいる。父を東京で捨ててきたのは二〇時間ほど前だった。帰宅すると、妻の民謡仲間の犬釘知恵がやってきた。どこかで西原たちが東京にでかけたと聞きつけて、みやげ物でも無心に来たのだろう。

「お義父さんは東京の戦友の家にはばらく厄介になることになったのよ。その人も一人暮らしてね、遠慮はいらないって言うものだから」

妻が知恵にしれしれと嘘を言うのを聞いて、輝明はコップ酒を呷りはじめたのだ。

「あら、だって忠志さん、すこしボケていたんじゃないか？」

「戦争のころのことは良く覚えているのよ。わたしなんか、晩酌のたんびに、南方の話を聞かされてこれよこれ」

妻は耳たぶをつまんでひらひらとした。たこができているということらしい。

「それに、あちらさんもすこしボケていてね。ちょうど良いんじゃないの」「ふーんそうなの。まあ、年寄りには年寄り同士のほうが気が楽なのかもね」父のボケが始まったのは、母が死んでからだ。女遊びでさんざん母を泣かせたくせに、その落ち込みようは息子の輝明から見ても相当なものだった。最初はふさぎ込んでいたと思ったのが、隣家の主婦に「この前お宅のおじいさんに、どなたさんでしかの？」と聞かれたわ「と言われ、慌てて医者にみせた。」「ボケだよ、年だからしかたない」という医者言葉は、ガンの告知ほどの衝撃があった。

最初のうちはおとなしかったのだが、目を追うにつれて、妻にちよっかいをだすようになった。最初は、「後ろから抱きしめられた」「尻をさわられた」「トイレの戸を急にあげられた」と妻に言われても、気のせいじゃないかと取り合わなかった。「お前に隙があるからじゃ」というと、妻は何も言わずに、湯のみを輝明に投げつけてきた。

「なにも、お義父さんの悪口を言っているんじゃないでしょうがっ。お義父さんは病気なのよ。ぼけがお義父さんにやらせていることぐらいあたしにもわかるわよっ。だけど、やっていることはひとつもぼけてなんかいない。わたしになにかあったら、あんたどつするの」

妻の怒気に気圧されるように、輝明も父の行動に注意を払うようになった。敏子の気のせいだと思っていたが、輝明の目の前で風呂に入っている妻を覗いている父や、夜中に自分たちの寝室を覗いてる父の姿を見るにつけ、こ

りやたいへんなことになったとおもった。だが、どうすればいいのかとなる
と考えもつかなかった。

いざとなったら、納屋の二階にでも閉じこめようと決心した昨日の夜、決
定的なことが起こった。

妻と一緒に父に食事をさせていると、父が急に妻の胸をわしづかみにして
押し倒した。ブラウスを引き千切りのしかかっている。妻は「お義父さんや
めてえっ。ちょっと、あんた、止めてよ」と叫んでいる。「おやじ、なにしてい
るかっ」と肩に手をかけた。振り返った父の顔は輝明の知っている父の顔
ではなかった。その男はにやりと笑い「おまえはわしの次じゃ。足を押さえ
とけ」といった。

しかたなく、父の肩を蹴飛ばして、馬乗りになって二、三発殴るとおとな
しくなった。

人に相談できることじゃない。殺すのはしのびないので、捨てることにした。車に乗せようとすると「人攫い！」と騒ぐので、縄で手足を縛り、猿轡をして後部座席に放りこんだ。関越自動車道を東京に向かった。最初は皇居前にでも捨てるかと思ったが、人目が多いので止めた。湾岸通りに入り、行ったり来たりしているうちにあの場所を見つけた。父はずっと縛られていたのでぐったりしていた。担ぎ上げて路肩に座らせて、捨ててきた。バックミラーを見ることがしばらくできなかつた。

あのあと、父はどうなっただろうか。

一升瓶が空になるころになっても輝明は酔うことができなかつた。

§ 6

「みんなの生前葬をやるつとおもつ」

山本は敬老会館に集めたメンバーを前にして、そう告げた。昨夜の新入り二人は、部屋の片隅でおとなしくしていた。まだわけがわからず様子をうかがっているのだろう。ボケていてもそれぐらいの知恵はある。

「生前葬ってなんだあね、山本さん」

キムがたずねてきた。

「死ぬ前に葬式をやるんだ」

「葬式なんて縁起でもない」

野末が声をあげた。自分が何者かわからなくても葬式が縁起でもないことだというのはわかるのだ。

「なにいつてんだ、どちみちみんな死んじまうんだぞ。それも、畳の上じゃなくて、この草っぱらで死ぬんだ。野犬に食い散らかされて、カラスにつつかれて死ぬんだ。どうせそうなるんなら、生きているうちに自分をいっぱい

誉めて誉めちぎってさ、成仏させてやるんだよ」

「けどさ、葬式やったところで、だれもこないでないの」

山本以外で唯一自分の住んでいた場所を知っている金城が、寝たきりになつているものに破れ団扇で風を送りながら、声をあげた。

「いや、おまえさんがたの息子や娘に参列させるんだ」

「そりゃ無理だ。どこにいるかもわからないじゃないの」

「大丈夫だ。ほとんどの人間の住所はわかる」

「どうやって調べるのさ」

「みんなを捨てていった車のナンバーから割りだせる。もちろん、鈴木のように、まったくわからないやつもいる。だけど、どこの地域かぐらいはわかる」

「わかったところで、捨てたやつらがくるかい。だいたいここにいるみんな

は、息子や娘がいることだつて覚えていないんだ。意味ないんじゃないの」「こなくてもいいじゃないか。だけど、このままで死んでたまるか。殺すならまだしも、道端に捨てて、後は神様に任せるなんて無責任なやつらを驚かせてやりたいんだ。生きていることを知らせてやるうじゃないか。野垂れ死んじやないことを知らせてやるうじゃないか。寂しくもなく、悲しくもなく、元気に死んでいくことを知らせてやるうじゃないか」

結局、山本の意見に反論などするやつはいなかった。生前葬の日取りは七月一五日と決定した。

忙しい毎日が始まった。まず山本は金城を連れて陸運局に出向いた。記録係の岩波が作ったナンバープレートの番号のメモをもとに車の所有者を割りだしていった。

五月はあっという間に過ぎ、うつつしい梅雨が来た。雨が降り続く間は、

手分けして、みんなの分の墓標を作った。

梅雨の間に三人が死んだ。土饅頭は九個になった。墓穴を掘る場所も少なくなってきた。やはり、行動を起こして正解だったと山本は思った。

七月に入り、雨の間隔が長くなるころ、葬儀の案内状をだすことにした。

山本が書いた見本を鈴木と岩波が写していく。敬老会の人々には「生前葬」といったが、案内状は「葬儀」ということで送った。生きていることがわかれば面倒　引きとつて世話をしなければならぬこと　を恐れて来ないやつがないとも限らないからだ。死んだということであれば、後ろめたさがあっても、安心してやってくるだろう。さらに、念を入れて、悪戯と思われてハガキを破り捨てられないために、生き残った敬老会メンバーを繁華街のゲームセンターに連れて行って、プリクラでシールを作り、ハガキに貼りつけてやった。

山本は住所がわからないものたちのことも忘れていなかった。住んでいたところがわからなくても、捨てた奴がいることはわかっている。そいつらは、自分たちの行為の結末を知る義務があると考えていた。不特定多数に訴えるには、マスコミを利用するのがいちばんだ。山本は「グループで暮らす単身の高齢者が生前葬をやります」という内容のハガキを新聞社やテレビ局に送ることにした。中国残留孤児の野反の分は厚生労働省に送った。

§ 7

伊藤の妻、直子は夕食の食材をスーパーに買いに行った帰り、いつものように玄関脇の郵便受けに手をつ突っ込んだ。手紙の束の大半は息子の教材や自分宛てのダイレクトメールだった。はでな色使いの手紙に混じった地味なハガキが目が止まった。決して上手ではない手書き文字に目を走らせたとき、

直子の周囲からすべての音が消えた。片手に牛乳やダイコンなど重たいものばかり入った買い物かごを下げたままだったが、それを忘れてしまうほどシヨツキングな文面だった。

拝啓 沸き立つ入道雲に梅雨明けを感じる今日この頃ですが、伊藤家の皆様におかれましてはますますご健勝でお過ごしのことと拝察申しあげます。

さて、去る五月四日深夜、貴殿が湾岸通り路傍に捨て置かれた御母堂様の葬儀を左記の日取りで行います。万障お繰り合わせの上、ご来臨賜わりたく、ご案内申し上げます。

向夏の折柄、お身体にはくれぐれもご自愛いただきますよう。

敬具

記

葬儀日時 七月一五日 午後六時半

場所 湾岸通り敬老会館

御母堂様をお捨てになった場所においでいただければわかります。

葬儀委員長 湾岸通り敬老会長 山本光太郎

性質の悪いいたずらとおもったが、警察に届けることなどできない。直子はハガキを握りしめたまま玄関に座り込んで、夫の帰りを待つほかなかった。ハガキの隅に貼りつけられたシールのなかから表情のない義母がじいっと直子を見上げていた。

群馬の西原家では、農作業から帰った輝明が、ハガキを見つけた。輝明は、ハガキを一読するとその場に崩れた。びっくりして駆け寄った妻に輝明は「喪服をだしておけ」とひとこと言って、這うようにして座敷に上がると野良

着のまま布団にもぐりこんで、そのまま寝込んでしまった。妻の敏子は、夫が投げだしたハガキを読むと、仏間にかけて込み、大声で念仏をあげ始めた。

伊藤も西原も衝撃が大きすぎて、なぜ、ハガキが届いたのかまで考えが及ばなかった。天罰だと思った。

二人にくらべれば、行方不明になった山本の死の知らせを受けた息子一信は冷静だった。ハガキに貼ってあったハートマークに縁取られたシールの中の父を見て、ホームにいるときより太ったんじゃないのかと思った。案内にある湾岸通り敬老会館が、自宅から数キロも離れていないのには少し驚いたが、それでさえ、そんなところに父はいたのかと思った程度だ。父が書き置きを残してホームが行方をくらましたときに、死は覚悟していたから、死んだことも自然に受け入れた。

伊藤や西原のように老親を捨てたのが、最近の出来事ではない家では、い

きなり葬儀の案内が来てパニックになっていた。気味の悪いハガキを握り締め、だれもが頭の中が真っ白になっていた。

そうした家のほとんどが、伊藤や西原と同じように、東京の親戚や病院に預けたという言い訳を近所にした後、半年ほど経ってから東京で死んだことにしていたからだ。一、二日留守にして、石ころを入れた骨壺を持ち帰って、地元で簡単な葬儀をだし、すでに檀家寺の墓に納骨をすませた家もあった。

親を道端に捨てたことを知っている人間が自分たち以外にいる事実も恐怖であったが、なによりも、知っていて、脅迫するでもなく、葬式に来いというのが、なによりも恐ろしかった。行ったら、どうなるのだろうか。警察が待っていることはないだろう。保護したときに連絡をよこすのではなく、死んでから連絡するということは、福祉事務所やボランティアではないのだろう。恐喝されるのか？ 行かなければどうなるのか？ こうしてハガキが届

く以上、住所が知られている。逃げられるわけがなかった。押しかけて来て脅されるだけなのだろう。

しかし、どうして住所が知れたのか。名前がわかるようなものは何一つ身につけていなかったはずだ。母や父の記憶が戻ったのだろうか。そう思いながら八ガキを見つめる者の目に、悪戯ではないぞといわんばかりに貼つてあるプリクラが妙に生々しく迫ってくる。それは、捨てた親が、死なずに、元気に、最近まで生きていたことを示しているからだ。あの時、引き返して、もう一度車に乗せれば、いまも隣にいただろう。勝手に死んだことにしていた親が生きていた。その間に父、母は何を考えたのだろうか。

酒を呷って寝るもの。輾転として朝までで寝付けなかったもの。仕事先に対する休暇の言い訳をどうしようと考えたもの。最悪の事態を予想して辞表を書くもの。用意できる現金を算段するもの。八ガキを受け取ったものた

ちは、それぞれに悩ましい夜を過ごした。

厚生労働省の中国残留孤児調査担当者だった早川は、背中に夏の日差しを受けながら、手にしたハガキを当惑しつつ読んでいた。ハガキの宛て名は、「残留孤児」担当者様とだけあった。孤児はもちろんその親の世代が高齢化していたいま、すでに担当課は縮小されている。誰かが一番長くその職にあった早川を思いだし、回されてきたようだ。早川は野反のことを覚えていた。親族との再会が適った数少ない一人だったからである。

調査記録を調べてみると、彼女は訪日調査の翌年に帰国して、埼玉県で暮らしていることになっている。ためらいながらも、その家に電話をしたが、すでに使われていなかった。中国で長く暮らしていた野反が日本でも珍しい生前葬を行うとは奇異に感じた。だが、いまどきの日本の老人になるほど日本の生活になじんだのだろうかとうと好意的に解釈した。

幸いというか、不孝なことに、ハガキにある敬老会館は、自宅からさほど離れていない。車で行けば一〇分ぐらいだろう。帰宅後にでかけてみるかと思った。

敬老会館からのハガキを受け取った大手新聞社の社会部長は、面白くも思った。電話番号などの記載がない点は怪しいと感じたが、とりあえず地元の支局に電話を入れて、「老人が集団で生前葬をやるんだそうだ。高齢化のネタとして使えるんじゃないの」と、記者を行かせることにした。

新聞社と同じ内容の葉書きを受け取ったテレビ局の報道局長は迷っていた。高齢化のネタとしては古い。電話番号がないのも怪しい。行ってみたら、葬祭業者のイベントという可能性も高い。迷ったあげく受話器を取り上げた。相手は他局の報道部長だ。大学の同期だった。聞いてみると、やはりハガキは来ていた。

「どうするんだ。おまえのところは行くのか」

「うちの局長は、ワイドショー担当に回したみたいだぜ」

「それじゃ行くんだな」

他局が行くなら自分のところも行かなくてはならない。まあ、新人の研修のつもりで人をだすかと考えた。

§ 8

七月一五日の夕刻になると湾岸通り沿いの残土置き場の入口に、看板が立てられた。

「湾岸通り敬老会 葬儀会場」

北中が入口に立ち、誘導する。真つ先に来たのはテレビ局だった。看板と会場を見て怪訝な顔をしたが、山本がディレクターに、湾岸通り敬老会の生い立ちや今日の生前葬の主旨を説明すると、俄然やる気をだしはじめた。一

番乗りのお手柄に後から来るマスコミを束ねる役割を与えたのも効を奏したようだった。跳ねるように会場をロケハンし、山本から式次第を聞き出すとカット割りをはじめた。しかも、応援を頼んで、中継車や電源車まで手配をしていた。

梅雨明け間近の空が紺色に変わり始めるころ、恐る恐るといった感じで車が一台二台と路肩に止まった。しかしハザードを点滅させているだけで、誰も降りてこない。会場と言われた場所はどう見ても残土置き場だ。どうやら担がれたらしいと思っっているようすである。

山本は、残土の山の上からその様子を眺めていた。傍らには鈴木が控えていた。

「鈴木、今日はおまえの家族はこないだろう。だが、必ず、おまえの姿を家族に見せてやるからな」

「私の家族などどうでもいいことです。いまは、山本さんや、ここのみなさんが家族ですから」

「それは当然だ。だがな、おまえを捨てたやつに教えてやりたいんだ。おまえがいたから、自分たちが生まれたきたことをな。そして、お前を捨てたことで、おまえの息子が娘はその子どもに捨てられる宿命を負ったんだということをおまえに教えてやりたいんだ」

そんな二人をカメラが追っている。

伊藤俊治は、二カ月ほど前に母を捨てた場所がすぐにはわからず、困惑していた。時間帯が違うことも影響していただろうが、あのときのことは全てが夢のようで、実際によく覚えていなかった。何度か、湾岸通りを行きつ戻りつしてようやくそれらしき場所に車を止めた。だが、そこは町会の会館でも、セレモニーホールでも、寺でもなく、人気のない残土置き場の前だった。

どうやら、悪質ないたずらに引つかかったと思い、エンジンをかけなおそうとしたとき、敷地から男がでてきた。

北中は、路側帯に止まっている車の前に回りナンバーを見て、手の中のメモと照合すると運転席脇の窓をたたいた。ウインドウが少しだけ降ろされると、唇を中に突っ込むようにして北中は声をかけた。

「伊藤さんですね」

伊藤は老人に名前を呼ばれてびっくりした。助手席では妻が気味悪そうに両腕で体を抱いている。老人は「母上の葬儀会場はこちらです。どうぞ」という。伊藤は北中の指差すほうへ車を乗り入れた。北中は伊藤が会場に入るのを見送ると、伊藤の車の後ろに止まっていた西原の車の窓を叩いた。

北中は最後の車が残土置き場に入るのを見届けると、葬儀会場の看板を取り外した。普段は人の気配などまったくなくない場所に、人が集まっていれば、

怪訝に思うものもいるだろう。パトロールの警官の目に止まらないとも限らない。テレビ局や新聞社が来ている以上、警察に知れるのは時間の問題だが、すべてが終わるまでは、そっとしておいて欲しかった。

羽田に降りる飛行機が光を点滅させる黒い影になり空に紛れはじめたころ、キムが呼びに来た。

「山本さん、みなそろったよ」

山本は鈴木の手を引きながら、残土の山を下り始めた。

残土置き場に引き込まれた道の突き当たり、三方を残土に囲まれた場所が葬儀会場だった。「遺族」らはテレビカメラや、報道という腕章をつけた人たちにおびえ、牧羊犬に追い込まれた羊のように一塊になっている。

テレビ局が手配した電源車のおかげで、会場は昼間のように明るい。残土置き場の東西に走るJRの車内の客がみたら、テレビか映画のロケーション

が行われていると思うに違いない。

その光の中に山本に連れられた敬老会のメンバーがやってきた。カメラのストロボが一斉に光った。

厚生労働省の役人早川は、老人の列の中に野反の顔を見つけた。だが、集まった喪服姿の人たちの中に、彼女の訪日調査に来ていた親族の顔がないことを不思議に思っていた。

伊藤俊治は山本の後についてきた母の姿を見て、足が震えだした。生きていた。生きていてくれた。かあちゃんが生きていてくれた。妻の肩を鷲掴みにしてもう一度つぶやいた「生きていてくれたよお」。涙を流して喜んでいる夫とは反対に、妻の直子は素直になれずにいた。死んだものと思っていた義母が生きていたという安堵はあった。だがそれよりも、義母が生きているそれは、死んでいたことよりも恐ろしいことのように思えた。この先、

生きていた義母を引き取る苦勞と、義母を捨てた嫁・家族と言う世間の指弾を受けながらの息を詰めるような生活を考えずにはいられなかった。夫は仕事を辞め、自分もパートを辞めざるをえないだろう。子どもは学校でいじめにあい、転校を余儀なくされるだろう。いや、それですめばまだいい。ローンの残っているあの家を売り払い、知り合いのいない土地へ引越し、ひっそりと生きていかなばならない。なにより、義母の存在は、義母が自分が死ぬまで恐怖以外の何物でもない。義母が自分たちに捨てられたことに気づいていようとしまいと、その顔をみるたびに、捨てたという事実をつきつけられる。義母を捨てたあと、家族で笑った瞬間瞬間を否定しつつつけられる。もう二度と捨てられない。ホームにいれることすらできないだろう。だが、耐えられなくなったら自分はどうするんだろう。捨てられないときには。

西原は妻に運転をさせてその間、酒を飲みつづけてきた。酒くさい息を吐

き、ふらふらと身体を揺らしている。このまぶしい光はなんなんだ。なぜ、うちのじいさんの葬式にテレビが来ているんだ。どうして、こんなところで葬式をやるんだ。なんで、こいつはおれの写真を撮っているんだ。西原は定まらない視線のおもむくままに混乱した思いをブツブツと口に出していた。まばゆい光の中に、父親が歩いて出てきたときには、顎が外れるほど驚いた。そんな家族の様子をカメラは容赦なく写していく。上空にはテレビ局が手配したヘリもやってきた。

山本が彼らを見まわして口を開いた。

「湾岸通り敬老会長の山本です。本日はお暑い中、またご多忙のところ、わたくしどもの葬儀にご参列いただき誠にありがとうございます。まず、お詫びを申し上げます。ご案内に葬儀と書きましたが、ご覧いただければおわかりのように、生きているものもあります。それは、生前葬と

すると、捨てたはずの親、死んでいるはずの親に、のこのこ会いに行ったら引き取らされて困るから、足をお運びにならないかたがいるのではないかと心配したからであります」

「遺族」たちは、自分たちに対するどのような非難の言葉が山本の口から飛び出すのか、戦々恐々としていた。

「それでは本日、葬儀を行います御霊を紹介いたします。まずは私、山本光太郎でございます。この土地で生まれ、山間の老人ホームで暮らしておりますが、死に場所を探してここにやってきたのが一年ほど前です。つぎに隣におりますのが、鈴木園枝です。私がここへきた当初、この残土置き場前の湾岸通りにはじめて捨てられた女性です。出身などは不明です。当時は、わたしも車のナンバーを控えるなどということまで考えが回りませんでしたのでね。本人は鈴木と言っておりますが、着ていた服には、小川という縫い取り

がありました。恐らく鈴木と言うのは結婚前の姓と思われる。この敬老会は、鈴木のように捨てられた老人をわたしが拾って作りました。ほとんどのものが、ボケていて自分の名前や住んでいた場所を知りません。ご遺族の中には、うまく捨てたはずなのに、なんでハガキが来たのか釈然としないかたもおられることと思います。いま申し上げましたが、車のナンバーからたぐらせていただきました。ご遺族をお招きできなかったものもおります。それは、ナンバープレートを泥で汚すなどして、隠していた悪質なケースでした。さて、続きまして、鈴木が北中、その……」

山本の紹介が続く。「遺族」は恐ろしいものを見るように凍りついている。そのなかをテレビカメラが動き、新聞記者がポケットカメラで盛んに写真撮影して回っている。そして、携帯電話で支局に至急応援をよこせとがなっていた。

「というわけで、これより、私たちの葬儀をとり行います。なにぶんにも捨てられた身で、金などございませんので、遺影などという洒落たものは用意できませんでした。私たち自身が遺影の代わりにここに座ります。皆様におかれましては、ご焼香にお進みください」

そういわれても誰も前にでる「遺族」はいない。報道関係者以外では唯一、「死者」に利害関係を持たない厚生労働省の早川が野反の前にでて、焼香をした。手を合わせながら声をかけた。「野反さん覚えていますか？ 面談調査を担当しました厚生労働省の早川です。今日は、びっくりしました。事情は、先ほどの会長さんのお話でわかりました。あなたの家族はわたしが必ず見つけてあげますからね」

野反は、遺影になったつもりでいるので、にこりともせずに固まっている。早川につられるように、それぞれの家族が、自分の親の前に進み、手を合

わせている。「おとうさんごめんなさい」「おかあさんごめんなさい」という言葉が聞こえる。

西原は、父の「遺影」の前で土下座していた。

「おやじ、すまなかつた。おれが悪かつた」

西原がにじり寄つて父の膝に手を掛けた。

「一緒に帰ろう。納屋の二階で一緒に暮らそう。なあ、それならいいだろう、敏子。おれが面倒を見るから、お前に迷惑はかけないから」

西原は妻を見上げて言った。

「人攫い！」

甲高い声が、西原を凍りつかせた。二ヶ月前に山本たちに向かつて人攫いと叫んだ男は、息子と嫁だった男女に指を突き立てて「人攫い！」と叫んでいた。

山本は息子が前に来ると、にやりと笑った。嫁は顔をそむけた。

「あてつけですか」

「あてつけ？ なんの」

「ホームに入れたことに対してですよ」

「いや、おまえらにはなんの恨みもない。おれはただ、海の見えるところで死にたかっただけだ。漁師のおれは緑に囲まれて死ぬなんてご免だよ。おまえに迷惑をかけないようにしたつもりだったが、そうもいかないようだな。まさかこんな多くのマスコミがくるとは思わなかった。家庭では厄介者でも、ニュースにはなるらしい。ところで春子さん、勝信は元気かい。ずいぶん大きくなっただろうな。今日は来ていないんだな。祖父が死んだというのに葬式にもこさせないのか」

春子は唇をかんだまま下を向いている。

鈴木の前には、誰も手を合わせるものがないことに気がついた新聞記者とテレビ局の人間がやってきた。生きている人間に向かって焼香をするというのは、なんとも変な気分だ。成仏してくれともいえないし……。

それほどたくさん人間がいるわけでもないのに、焼香はあつという間に終わった。それをみて、山本が遺影から生身の人間にもどった。

「ここにいるのは二人ですが、この葬儀をやるうと決めてから今日までに、三人が死にました。これまで都合九人がここで亡くなりました。そのかたたちの墓はこちらです。案内が来たのに、自分の親がないことにこ不審を感じられたかたは、こちらへどうぞ」

山本は手で残土の山の上を指し示し、斜面を登っていく。遺族の中から数人が歩きだした。

雑草を刈り払った場所に石が八つ並んでいた。

「一番向こうから、代山さん、その隣が野島さん、神石さん、手塚さん、そのほかのかたは残念ながらお名前も住んでいた場所もわかっていません。ただ、かれらを捨てていった車のナンバープレートは北海道、長野、岩手、三重でした」

テレビカメラを肩に担いだカメラマンがファインダーを覗きながら、まるで金魚の墓だね」とつぶやいた。「親を捨てるなんてひどいやつだぜ。まったく親の面が見たい。あ、捨てちまったからわからないか」と皮肉る記者の声をうなじで受け止めながら、遺族は手を合わせていた。

残土の山の下では、生き残った老人たちが家族に「一緒に帰ろう」といわれていた。だが、老人たちには一緒に帰るということが理解できない。目の前で声をかけてくるのは他人なのだ。頑として動こうとしない老人に、「これ以上恥をかかせないでくれ」とすごむものもいたが、「親を捨て、いまままで

放つておいたお前こそ恥知らずではないか」と、墓から降りてきた山本に一喝されて黙った。

「この人はおまえの親だぞ。この人がいなければおまえさんはこの世に存在しなかった。その事実には少しは敬意を払ってもらいたいものだ。とはいっても、この人は、おまえを産んだことも忘れている。もう、あんたとは関係がない存在なんだ。あんただって親とは思えないから棄てたんだろう。いまさら親孝行などしようと思うな。親を捨てたときに、あんたも親から捨てられたんだ」

山本の言葉に誰もがうつむいている。

「ボケたから捨てる、理解できないわけじゃない。さぞや地獄を見たんだろうと思う。止むに止まれぬところに追い詰められていたんだろう。ボケたものなかには、アルツ何とか言う病気のやつもいるだろう。でも、大半のやつ

が作られたポケじゃないのか。胸に手を当てて考えてみる。年寄りだから何もしなくていいと、ベッドに寝かせきりにしなかったか。寝返りもできないような狭いベッド、おまけに足が床にとどかないような高さだ。それじゃ、柵こそないが、閉じ込めと同じだ。飯もベッドで食わせる。一日じゅう寝巻きのままだ。生まれたばかりの赤ん坊じゃないんだ。何十年も生きてきた人間だ。好き嫌いもある。でも、あんたたちはそんなことを考えたことがあるかね。ポケ始めた年寄りは、恥ずかしがっているんだよ。あんたたち以上に自分に戸惑っているんだよ。恐れているんだよ。おののいているんだよ。あんたたちは、それをわがうとしたことがあるか。たった一度、小便をもらっただけで、オムツをさせたんじゃないか。おまけにしっかりつけて。自分の子どもを育てるときにはどうした。一回や二回失敗してもはげましてやらなかったか。どうして、親にはそれができないんだ。赤ん坊と同じだ。オムツ

が濡れれば気持ち悪い。糞が溜まれば脱ぎたくもなる。転んだときもそうだよ。子に対しては励まして、自分で起きあがるようにするのに、じいさんばあさんのときは、外出させないようにしなかったか。ガスレンジをつけっぱなしにしたといつては、台所から老人を追いださなかったか。まずい食い物を口に入れられれば吐きだすさ。どうして赤ん坊のときは優しくそれを受け止めて、親の場合はできないのかね。大人だからか。年寄りのわがままっていうけどね、年を取って人格が丸くなるなんて嘘なんだよ。考えてもみろ、純粹無垢なはずの赤ん坊だって、わがままじゃないか。子どもが異文化だなんて、えらい先生がいつていたけどよ、老人も異文化なのさ。子どもの人権や個性を尊重するというなら、ボケ老人の個性や人権も守ってもらいたいものだ。ボケていても人間だ。あんたらからすればめちやくちやな世界に生きていても、彼らの中では完全に完結した世界に生きているんだ」

山本は一気にことを投げ出すと集まった人々を見まわした。

「本日はお忙しいなか、ご参列頂きまことにありがとうございます。おかげさまで、自分たちのおとしまえをつけることができました。みなさんがたはこれからの人生で、親を捨てたおとしまえをつけていただくことになりま

す。警察の事情聴取も受けるでしょう。しかし、すくなくとも敬老会の人間にはあなたがたを訴えようなんて者はひとりもいませんから、どうぞご安心ください。願わくば、みなさまがたが年老いるまでに、親を棄てても拾ってくれる人がいる社会ができていきますようにお祈りしております。それじゃ、おやすみなさい」

結局、「遺族」は誰一人、親を連れ帰ることができなかつた。

湾岸通り敬老会の生前葬の様子は、その日の夜のニュースのトップで流された。テレビ局には、身元不明の老人たちに関する情報提供の電話が殺到した。明日になれば、ワイドショーや、新聞の社会面も飾るだろう。「現代の姥捨て山」という見出しが踊るはずだ。「姑をこみのように捨てた鬼嫁」などというのものもあるかもしれない。

鈴木園枝の息子小川孝は、富山の山村で深夜のニュースを見ていた。孝は、繰り返し放送される画面に母親の姿を見つけたときには、安堵より「生きていたんだ」という驚きが先に立った。自分で捨てておいて　と言われればそれまでだが、迷子になっていた飼い犬が突然現れたような気分だった。突きつめていけば嬉しいのだろう。だが、嬉しいがってばかりはいられない。自分が葬儀に招かれなかったということは、母を捨てたことがばれていないということだが、すぐにそれは間違いだと気がついた。「教え子が経営している

東京の病院にいる」ということになっていった母は、半年前に死んだことになっていくのだ。近所のものには、本人の遺志で献体をしたから、しばらく葬式をだせないといっている。その母が生きてテレビにでていく。小川という名前もだされた。村人が見ていけば嘘がばれる。運良く村びと全員が早寝していても、長く小学校の教師をやっていた母の教え子は健在だ。明日になればこの村にもいられなくなる。空気が薄く感じられ肩で息をしながら頭を抱えていると電話が鳴った。

知っているぞ、見たぞと鳴りつづけた。

観念した孝が取り上げた電話は村長からだった。村長は母の親戚筋だった。「ちよつとお、どういことなのさ。あんたとこの園枝さんは生きていくじゃないの。テレビ見てたでしょ？ まったく、わしらあんたらにころつとだまされつたわけだね。いい面の皮だね。親を捨てておいて平気な顔して

暮らしてんだから、あんたたち鬼だね……」。

返事などできなかつた。

そのころ湾岸通り敬老会館には、警察が大挙してやってきていた。ニユースを見ていた地元自治体の役人も来た。地主の大手デベロッパの総務部長もやってきた。警察は勝手に死体を埋葬したことを問題にしているようだった。しかし、山本が「わしら年寄りもみな逃げも隠れもしない。明日にしてくれ」というと、入口にだけ警備の人間を残し、帰った。

最後に残ったのはテレビ局のクルーと厚生労働省の役人早川、新聞記者だけだった。早川が「いまなにをしたいですか」と山本にたずねた。山本は疲れをにじませたまぶたを開け、「ほんとうはこの時間は、コンビニに弁当の売れ残りを調達に行く時間なんだが、きょうは忙しくてできなかった」といった。ディレクターが、ADを呼んで、弁当を買いに行かせるという。「ぼくの

おごりです」と気前の良いことをいつている。スクープをモノにしたのだから、弁当なんて安いものだろう。それにどちみち取材費で経費として落とせる。それを見透かしたように山本が「酒も頼む」といった。足を止めて振りかえったADはディレクターの顔を見たが、ディレクターが眼でうなづくくと、残土の山を駆け下りていった。

ADが買ってきた賞味時刻の過ぎていない弁当と酒やジュースで精進落としをすませると早川と新聞記者は帰っていた。テレビ局のクルーは車の中ですずすという。ディレクターは山本に「明日になると他社が押しかけると思いますが、わたしたちを優先してお願いしますよ」といって、車に戻っていった。

山本は残っていた弁当を警備の警官に差し入れ、「ご苦労様です。それじゃお休みなさい」といって、小屋に戻った。

二時間ほど経つと、残土置き場に散在する小屋から老人が一人二人とでてきて、敬老会館に集まった。そして歩けないものはおぶわれて、運河に向い、二艘のべか船に乗り込んだ。

時刻は四時くらいだろう。ちょうど引き潮の始まる時刻だった。

「ほ、それじゃいきますか」という山本の声で金城が櫓をグイと押しだした。山本は掌につばを吐きつけ、シャリシャリとこすり合わせると櫓を握った。瞬間、潮風が鼻をくすぐった気がした。

ギユイギイという音を立てながら船は運河を進んでいく。引き潮のつて、するすると海にでた。右手遠くにはマンションが輝き、左手には工場の煙突がきれいなイルミネーションを作っていた。二艘の船はすべるように、明るくなり始めた東京湾をまっすぐに進んでいった。

夜が明けると、出遅れたテレビ局や新聞社、地元自治体の人間、警察、そ

して老人たちと一緒にでなければ家に帰って、言い訳がができない家族がおしにかけてきた。

しかし、敬老会館には誰もいなかった。他の小屋にも誰もいなかった。昨晩は九柱しか墓がなかった場所に新しい二本の墓柱が立っているのを、昨夜弁当を買いに行かされたA Dが見つけた。真ん中のいちばんおきな柱に「はい、さようなら。あっちで待っているから早くおいで」と書いてあった。

慌てた警察が柱の下を掘ったが何もでてこなかった。

【完】

湾岸通り敬老会

初版 2000年10月25日発行

改訂新版 2002年5月6日発行

著者 ぶんろく

編集・発行 **Bunroku's Factory**

© *Bunroku 2002*